

1歳6か月健診における浴室での事故、ならびに 浴槽の実態調査 (分担研究：小児の事故とその予防に関する研究)

研究協力者：山中 龍宏*

【要約】 1歳6か月健診の機会を利用して、乳幼児のいる家庭の浴室、ならびに浴槽の構造、さらに健診の時点までに浴室で経験した事故について調査した。その結果、1年半のあいだに、乳幼児の1/3は浴室での事故を経験していた。乳幼児が浴槽に転落する危険性が高い「洗い場からの縁の高さが50cm未満」の家庭が7割を占め、残し湯をしている家庭は7割あることがわかった。また、乳幼児が浴室に入れられないような工夫は4割の家庭でしか行われていなかった。これら3つは、乳幼児の風呂場での溺水発生の主要な危険因子であるが、現在でも溺水の危険性が高い家庭が数多くあることがわかった。

【見出し語】 乳幼児、溺死、溺水、浴槽、健診

はじめに

わが国の、幼児期の不慮の事故による死亡をみると、溺死と交通事故が主なものとなっている。平成7年度のデータによれば、不慮の溺死者数は、0歳(22名)、1-4歳(176名)、5-9歳(112名)、10-14歳(52名)となっている。このうち、浴槽での溺死は、0歳(21名)、1歳(81名)、2歳(8名)、3歳(5名)、4歳(2名)、5-9歳(10名)、10-14歳(8名)となっており、乳幼児の溺死の発生場所として浴槽が多いことがわが国の特徴となっている¹⁻³⁾。0-1歳の溺死

では、その8割が浴槽での溺死となっている。溺死の発生率の国際比較においても、わが国の乳幼児の溺死の率は高く、事故防止活動の大きなターゲットとなっている。

今回、1歳6か月健診の場を利用して、一地域の乳幼児をもつ家庭の浴室、浴槽の状況、ならびに浴室での事故の実態について調査を行った。

研究目的

以下のようなことを目的として調査を行うこととした。

*こどもの城小児保健部

1) 生まれてから1歳6か月までに、浴室で起こった事故の実態について把握する。

2) 1歳6か月児のいる家庭の浴槽の構造、様式について把握する。

3) 1歳6か月児をもつ保護者が、浴室での事故防止のためにどのような対策をとっているかについて把握する。

対象と方法

E市の人口は27,000人で、年間の出生数は240人（平成8年）である。健診の受診率はほぼ100%である。平成8年9月から平成9年8月の1年間に、1歳6か月健診を受診した229名の保護者を対象とした。

方法としては、健診の通知とともに調査票を郵送し、健診時に回収した。1歳6か月健診時の通常の調査票の他に「浴室に関するアンケート調査票」を加えて郵送した。その調査内容としては、浴槽の様式、現在までに浴室で何らかの事故の経験があるか否か、もしある場合には、どのような種類の事故が、何か月ころ、何曜日に起こったか、医療機関を受診したか否かについてたずねた。さらに、浴槽に残し湯をしているか否か、浴槽のふたの有無、ふたの強度についてもたずねた。最後に、洗い場から浴槽の縁の高さについてたずね、その測定のために紙のメジャーもいっしょに郵送して保護者に測定してもらった。データの解析は統計ソフトSASで行った。

結 果

1) 浴室での事故の実態

浴室で危険な目にあったことが「ある」

と答えたものは73人（32.3%）であった。事故の内容（複数回答）についてみると、滑った：51件（61.4%）、溺れた：25件（30.1%）、やけどした：2件（2.4%）の順であった（図1）。

事故が起こった状況の記載を見ると、滑った状況としては、「一人、または兄弟とふざけていて浴槽の中で滑った」、「洗い場で滑って、頭をぶつけた」、「浴室の掃除をしている時にそばにいて滑った」などであった。

溺れた状況としては、「子ども一人を浴槽の中に立たせておいて、母が体を洗っている、あるいは兄弟の体を洗っている時」など、一緒に入浴していたが親がちょっと目を離したすきが多かった。その他、「浴槽の中のおもちゃを取ろうとして浴槽をのぞき込んで溺れた」、「日中、母が電話をしているすきに浴室に入り込み、浴槽の水を汲もうとして水深20cmの所へ落ちた」、「風呂場で遊んでいて、水が7割くらい溜っている浴槽に落ちた」などがあった。

やけどした状況としては、「シャワーの金属部分に触り、やけどをした」であった。

事故にあった時の年齢は、1歳が36件（33.0%）と最も多く、次いで1歳3か月が15件（13.8%）で、1歳から1歳6か月の間で100件（91.7%）が占められていた。最年少の例は5か月であった（図2）。

事故が発生した時間をみると、20時が最も多く35件（37.2%）で、次いで19時が28件（29.8%）であり、入浴時間に相当すると思われる18時から21時までのあいだで88件（93.6%）が占められてい

た(図3)。

2) 浴室の構造、浴槽の様式

風呂のタイプとしては、「ガス・灯油式」が115件(50.4%)と全体の半数を占め、次いで「給湯式」が101件(44.5%)、「24時間入浴可能なタイプ」が11件(4.8%)であった。

洗い場からの浴槽の縁の高さについてみると、50cm未満の家庭が70.6%を占めており、乳幼児が転落する危険性が高い浴槽の家庭が多かった(図4)。

洗い場からの浴槽の縁の高さと、風呂場での事故発生の関係を見てみると、「浴槽に落ちた」という事故はすべて50cm未満の高さで起きており、50cm以上の高さでは転落はみられなかった(図5)。

浴槽のお湯の状態は、「いつも残し湯をしている」「ときどき残し湯をしている」を合わせた家庭が69.8%と全体の7割を占め、残し湯をしている家庭が多かった(図6)。

浴槽のふたについてみると、ふたを使用している家庭は90.4%とほとんどの家庭でふたが使用されていた。ふたのタイプとして、「硬くてしっかりしているふた」を使用している家庭が75.7%、「軟らかいふた」を使用している家庭は20.9%であった。

3) 保護者が行っている事故防止対策

子どもが浴室に入らないような工夫について、「何もしていない」という家庭が62.3%と最も多く、「何らかの工夫をしている」家庭は全体の4割にも満たなかった。工夫の内容としては、「ドアを

閉める」が49件(52.7%)と最も多く、次いで「鍵をかける」が29件(31.2%)であった(図7)。

考 察

今回の調査では、乳幼児のいる家庭において、洗い場からの浴槽の縁の高さを各家庭で実測してもらった。その結果、乳幼児が浴槽に転落する危険性が高い「洗い場からの縁の高さが50cm未満」の家庭が7割を占めていることがわかった。また、残し湯をしている家庭が7割あることもわかった。さらに、乳幼児が浴室に入れられないような工夫は4割の家庭でしか行われていなかった。これら3つは、乳幼児の浴室での溺水発生の主要な危険因子であるが、現在でも溺水の危険性が高い家庭が数多くあることがわかった。

また、今回の調査によっても、今までに浴槽に転落したことがある乳幼児は、浴槽の縁の高さが50cm未満の家庭に限られていることがわかった。これらから、浴室での溺水が発生しやすい1歳前後の健診において、自宅の浴槽の縁の高さについて保護者にたずね、高さが50cm未満の家庭の保護者に対しては、「子どもが3歳になるまでは、残し湯の習慣をなくす」「子どもが浴室に入れられないような工夫をする」という指導を徹底させる必要があると考えた。

しかしながら、事故は気をつけていても発生するものであり、今後は、たとえば「子どもが浴室に入ったら警報が鳴る」ような機器を用いて、浴室での溺水を防止する活動が必要であろう。今回の結果を踏まえ、次には具体的な溺水防止活動

を展開する予定である。

文 献

- 1)高野 陽：日本小児科学会雑誌 94 :
1, 1990
- 2)水田隆三：日本医事新報 No. 3553 :
43, 1992
- 3)水田隆三：小児科診療 59 :1603,
1996

図1 お風呂での事故の内容(複数回答)

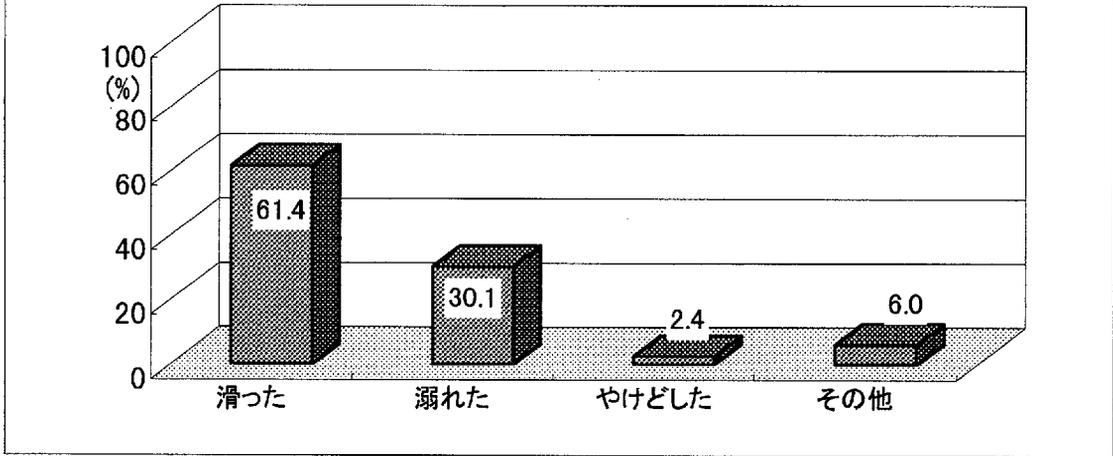


図2 お風呂での事故にあった年齢

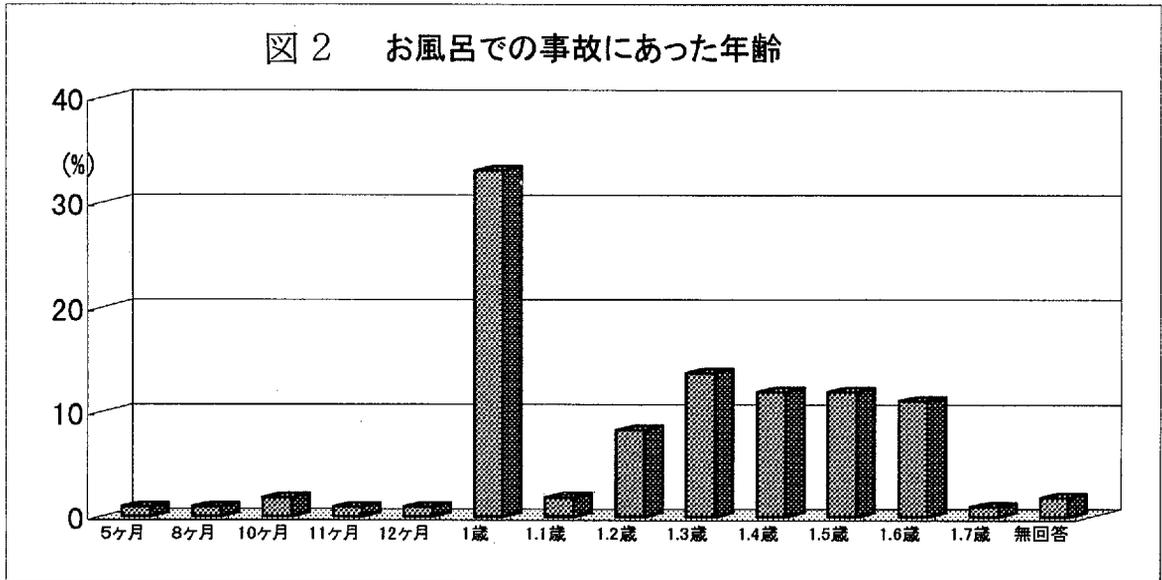


図3 お風呂での事故の起こった時間

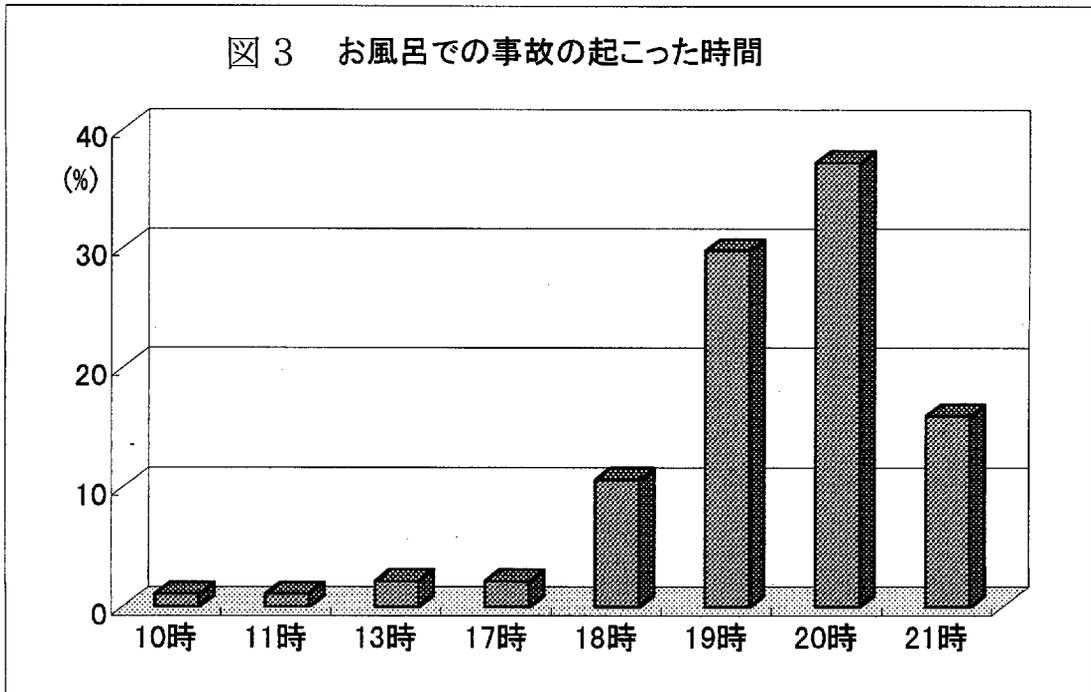


図4 お風呂の浴槽の高さ (n=221)

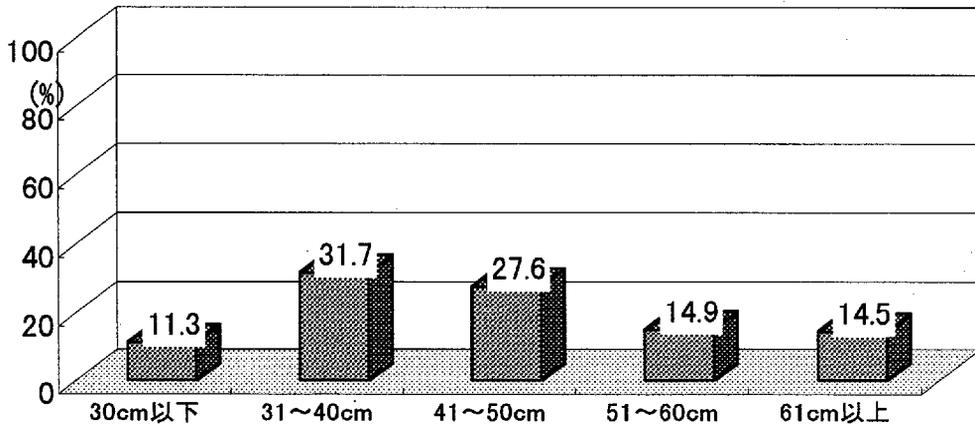


図5 浴槽の高さとお風呂での事故の発生

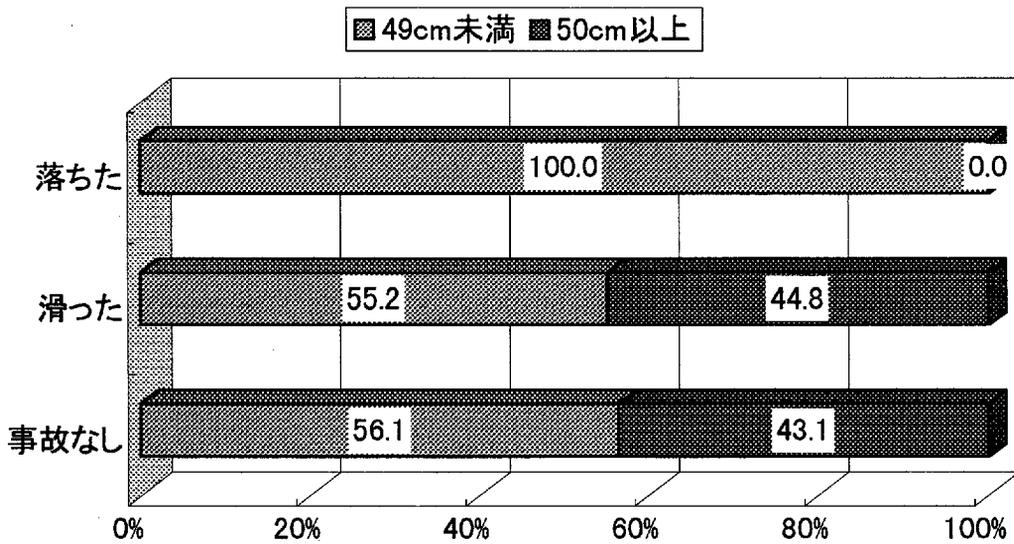


図6 お風呂のお湯の状態 (n=228)

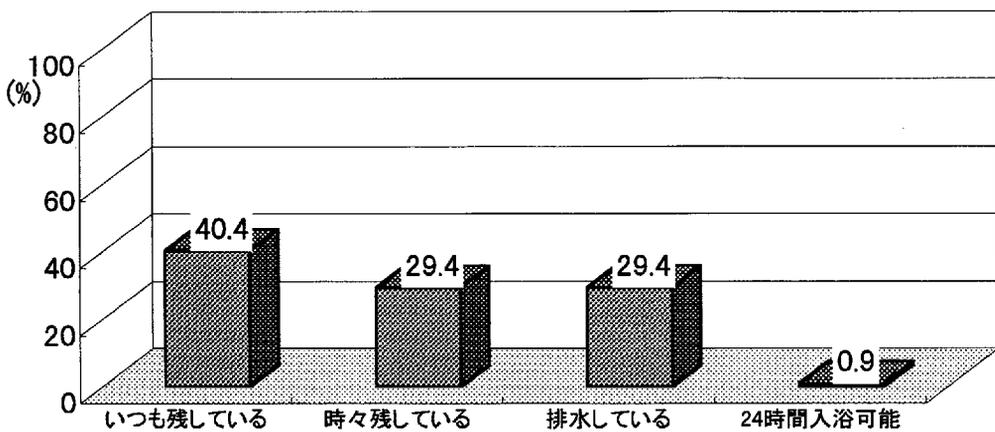
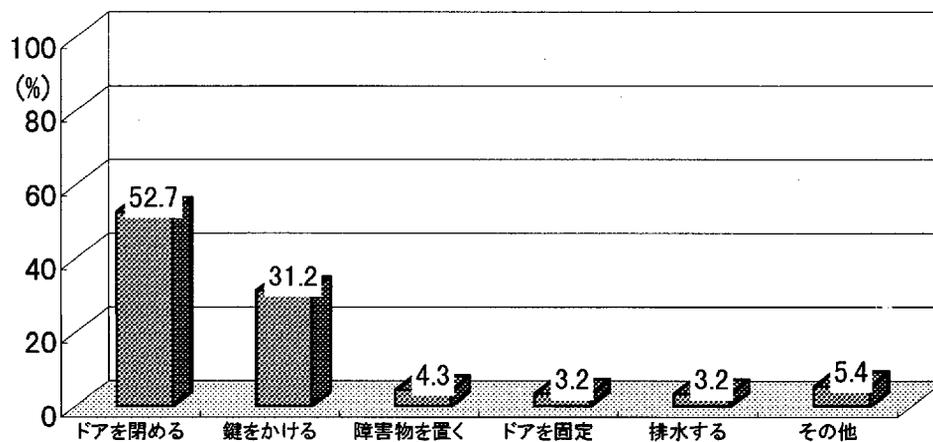
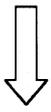
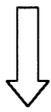


図7 子どもがお風呂に入らないようにしている工夫 (n=93)





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



【要約】 1歳6か月健診の機会を利用して、乳幼児のいる家庭の浴室、ならびに浴槽の構造、さらに健診の時点までに浴室で経験した事故について調査した。その結果、1年半のあいだに、乳幼児の1/3は浴室での事故を経験していた。乳幼児が浴槽に転落する危険性が高い「洗い場からの縁の高さが50cm未満」の家庭が7割を占め、残し湯をしている家庭は7割あることがわかった。また、乳幼児が浴室に入れないような工夫は4割の家庭でしか行われていなかった。これら3つは、乳幼児の風呂場での溺水発生の主要な危険因子であるが、現在でも溺水の危険性が高い家庭が数多くあることがわかった。